66

明治女医史の基礎的研究（三）

婦人共立育児会病院

三崎裕子

婦人共立育児会病院は、民間の婦人慈善団体によって一九一〇（明治四三）年に設立された貧者の病児を救療するための慈善病院である。この病院については、これまで特に言及されることもなかったが、明治女医史を鑑みる時、その存在は非常に重要な役割を果たしたと思われる。

明治年間に医師の資格を取得した二三〇人余の女医の医療活動を概観すると、当初医術開業試験に合格した女医は、女医を受け入れる数少ない病院を捜して短期間研修を行った後、各地で開業するというのが一般的であった。しかし女医を受け入れる病院は非常に限られ、また医師として正当に評価されないことも多く、女医達は個々の努力によってのみ医師としての立場を維持する状況が続いていた。また初期の女医にとっては開業以後も、より新しい技術を習得し研究をする場はほとんどなかった。このような中で医師がすべて女性で、また女医のための研修活動も行う婦人共立育児会病院が設立された意義は大きい。

病院の母体となった婦人共立育児会は一八九一（明治二四）年に、有栖川宮親王妃慰子を総裁とし、会頭に侯爵鍋島直大夫人を据える、いわゆる名流夫人の慈善事業団体として設立された。当時の日本の上流社会では、鹿鳴館ブームの下、ヨーロッパ社会の慈善事業に対する興味関心も高まり、様々な慈善団体を組織されていた。婦人共立育児会もそのような団体の一つであった。しかしこの団体は、明治女医にとっては、その社会的活動を広げる一つの足がかりとなった。それは、この組織に、発足間もない帝国大学医学部小児科教室を主宰する弘田長が深く関わっていたからである。

一九三七（昭和一二）年に、東京帝国大学医学部小児科教授栗山重信が記したところによると、この慈善団体は弘田長の主導によって設立されたという。現存する数少

ない婦人共立育児会の史料によれば、弘田は男性ではただ一人、会の名簿に名を連ねている。また婦人共立育児会の規定によれば、当初病児の治療は帝国大学病院において行われており、弘田がこの会の組織、運営に深く関わっていたことは推測に難くない。

一九一〇（明治四三）年、婦人共立育児会は独立した病院を設立した。その際、弘田は会の幹部と図り、病院の医師、薬剤師を全て女性とした。それによって婦人共立育児会病院は、当時の若い女医にとって何よりの研修の場となり、また小児科を研究する者にとっては、東大小児科に繋がる貴重な場ともなった。また弘田はこの病院で「女医小児科講習会」を主催した。病院に実際に勤務した女医は一九〇六（明治三九）年以降に医師となった者であったが、この講習会には吉岡弥生を始めとする古参の女医も参加し、当時の小児科医療の最前線にあった弘田から、多くの新しい知識を得ていた。このように婦人共立育児会病院は、個人として存在していた女医を、研修、研究を通じて連携させる場ともなったのである。

婦人共立育児会の診療が女医によって担われることになった背景には、溯って明治二〇年代初頭から、たとえ医師として扱われなくても、最先端の医療を学びたいと望み、弘田を訪ねてきた多くの女医の存在があった。すなわちこの病院は、荻野吟子以後二十余年の女医の活動の成果とも言えるであろう。そしてさらに、ここから巣立った女医が、新たに様々な形で医療の幅を広げることになった。

以上のように考えると婦人共立育児会病院の存在は、明治女医史の一つのエポックと位置づけられるであろう。

（埼玉県所沢市）